

国語科における指導の重点（身に付けさせたい力）※学習指導要領に照らし合わせて	
ア 知識及び技能	イ 思考力、判断力、表現力等
常用漢字の読み書き、慣用句や四字熟語も含めて、理解したり、表現したりするために必要な語句・語彙力の定着。	目的や意図、場に応じて、表現の仕方や言葉の選び方を考え、自分の考えが分かりやすく伝わるように工夫する力の定着。

	児童・生徒の学力の状況（課題）	授業における具体的な手だて	成果検証（2月）
第1学年	ア 漢字を読む力は定着しているが、書く力は定着していない生徒が多い。 イ 自分の考えを具体例などを交えながらわかりやすく説明することを苦手とする生徒が多い。	ア 漢字テストを繰り返し行い基礎の定着を図る。漢字の成り立ちなど、生徒が漢字に興味をもつ授業を行う。 イ グループ学習やペア学習を行う。発表する際に、どのように伝えれば相手にわかりやすく伝えられるかのポイントを押さえてから発表させる。	ア 市学力調査【知識・技能】 63.5% イ 市学力調査【思考・判断・表現】 42.2% 所見 小学校までの漢字が定着してきた一方で、それを文章に表現し、具体的な言葉にすることを苦手とする生徒が多い。また、文章を読み、それを自身の考えに書き起こすことも課題である。
第2学年	ア 小学校で学習した漢字を書くことができない、文法事項への理解が浅いなど、基礎・基本が定着していない生徒が多い。 イ 叙述や描写に注目して、事実と意見の関係や登場人物の心情の変化を捉えることができない生徒が多い。	ア 新出漢字や文法を含め、ことわざなど意味や文、使用場面の提示し、自分で扱う中で学習させ、小テスト等を実施して定着を図る。 イ 教材の中で重要な部分に線を引かせ、そこから考えたことを説明させたり、表現させたりすることを通して、文章の内容の理解を図る。	ア 市学力調査【知識・技能】 68.9% イ 市学力調査【思考・判断・表現】 54.3% 所見 文法・語句に関して、特に古典分野に難点があるとみられる。また、文章の展開や構成を工夫することも不得手とする生徒が多い。
第3学年	ア 小学校中学年からの漢字が書けない、日常的な語彙が分からないなど、基礎・基本が定着していない生徒が多い。 イ 思いつくままに話す、書くなど分かりやすいように伝えられなかったり、書くことに苦手意識があったりする生徒が多い。	ア 新出漢字や既習漢字、ことわざなど意味や文、使用場面の提示や、辞書を引かせるなどして学習させ、小テスト等を実施して定着を図る。 イ 討論やスピーチ、意見文を書かせる学習活動を行う。その際に、話型や文章の型、書き出しの例を示すなど型の定着を図る。	所見 漢字を知っているものの、文意に応じて使用できないなど、基本的語彙力が乏しい。一方で、話型や文章の型を身に付けることで、話す・書くことへの抵抗感が減った生徒が増加した。

■「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた一人1台端末等 ICT の効果的な活用について	■学習の見通しをもたせることや学習を振り返ることの工夫等、「学びに向かう力」の育成に向けた取組について
1年：互いに創作した詩・俳句・意見文などを共有し、互いの考えを確認する。 2年：単元の意味調べ、課題等の共有を行う際に活用する。また、学習テーマに対して、生徒一人一人に合った形での学び合いや共有の際に使用する。 3年：学習テーマに対して、生徒一人一人が自分の個性や経験に応じて考えをまとめたり、互いの考えについてアドバイスし合ったりする場面などで活用する。	1年：1時間ごとに振り返りシートを記入し、学習内容の定着を図る。 2年：第1時に必ず単元全体の見通しをもたせ、生徒自身が学習課題を設定する。単元の最後に自己の取組を振り返る活動を実施する。 3年：単元の最初に既習事項を生かした学習目標を設定させる。単元の最後に目標と取り組んだ結果を照らし合わせ、学習を振り返らせる。

算数科・数学科における指導の重点（身に付けさせたい力）※学習指導要領に照らし合わせて			
	ア 知識及び技能		イ 思考力、判断力、表現力等
基礎的な概念や原理・法則などを理解するとともに、事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付けるようにする。		事象を論理的に考察する力、数量や図形などの性質を見出し統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力を養う。	

	児童・生徒の学力の状況（課題）	授業における具体的な手だて	成果検証（2月）
第1学年	ア 小学校で学ぶ四則計算が定着していないため、授業についていけない生徒が多い。 イ 問題文を理解・把握することができず、立式に表すことができず、無解答が多い。	ア 授業開始に小学校レベルの基礎的な計算練習を行い、計算力を身に付ける。 イ 文章題における指導時には、図で表すように指導し、文章を把握する力を育成する。	ア 市学力調査【知識・技能】 44.4% イ 市学力調査【思考・判断・表現】 32.6% 所見 計算方法を理解していても、計算能力が追い付かず、正答に辿り着けないと思われる。
第2学年	ア 具体的な事象の中の数量の関係を文字を用いた式で表したり、式の意味を読み取ったりすることができない生徒が多い。 イ 基本的な平面図形の性質を見出し、既習の性質を基にして、確かめ説明することができない生徒が多い。	ア 文字を用いて式を表す前に、一度具体的な数で立式をしてから考えることを促す。新しい定理が出てきた際に式の意味を考える時間を設ける。 イ 図形の基本的な性質を導入で確認をし、なぜその性質が成り立ったかを確認する。また、ペアワーク等で説明する場面を設ける。	ア 市学力調査【知識・技能】 49.9% イ 市学力調査【思考・判断・表現】 30.3% 所見 式の意味の読み取りや、数量の関係や図からの立式がまだ十分でないが見られる。
第3学年	ア 関数や平面・空間図形など、現在履修中の単元以外の正答率が極端に低い。 イ 既習の知識や考え方をを用いた応用問題（特に初見の問題）が無解答が多い。	ア 授業導入時に計算練習を行うとともに、既習事項を振り返り、定着を図る。 イ 教科書以外の応用問題を出題し、出来るだけ多くのパターンの問題に触れられるよう工夫する。	所見 計算については、毎授業取り組んだため、大半の生徒が都立の過去問演習等においても計算問題30点中を30点を取れるようになった。

■「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた一人1台端末等 ICT の効果的な活用について	■学習の見通しをもたせることや学習を振り返ることの工夫等、「学びに向かう力」の育成に向けた取組について
1年：具体的な場面から抽象的な場面へと考えるために、教科書デジタル教材に搭載されている文章題を図で表す教材を活用する。 2年：1次関数の傾きや切片の値を変え、グラフがどのように変化するか確かめ、式・表・グラフの関係性を理解する。 3年：単元末に「ネットレ」を利用し、各自の課題に合わせた演習をタブレットで行っている。	1年：自主教材を充実し、それをもとにした小テストを行い、不十分な場合はもう一度同じ小テストを実施し、繰り返し取り組む習慣を身に付けさせる。 2年：数学教室を活用し、今後の授業で学ぶ範囲を常に提示している。家庭学習プリントを用いて、解きなおし、振り返りをする。 3年：・毎授業「本日やること」を黒板で明記し（常時掲示）、見通しをもたせる。 ・定期考査後に「やり直しレポート」で自主宿題を課し、主体的に学ぶ力を付ける。